

2022.8.6



龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

# 記憶に残るライヴ名演集

## プログラム

オリジナルCDコンサートで使用する音源は大部分がFM放送やBS放送からのライヴ録音です。ライヴ音源はその場限りの真剣勝負から生まれる臨場感、演奏から伝わる生々しい緊張感などスタジオ録音では聴く事の出来ない音を聴き取る事が出来ます。それが最大の魅力ですが、今回はこれまでずっと記憶に残っている名演奏の数々をご紹介しますと思います。

1972年のザルツブルク音楽祭では、5人の指揮者がドレスデン・シュターツカペレを指揮してそれぞれコンサートを行いました。巨匠カール・ベーム(1894~1981)の振った「死と変容」は当時、燃え滾るベームの指揮とオーケストラの質の高さに圧倒された演奏です。不世出の天才チェリスト、ジャクリーヌ・デュ・プレ(1945~1987)のシューマンは日本では放送されませんでした。海賊盤CDが出た時の感動は忘れられません。溢れんばかりの情熱と朗々と歌うチェロの音はデュ・プレの真骨頂と言える演奏でした。今回は拍手入りの海外テープからの音源です。1973年、時の大歌手フランコ・コレリ(1921~2003)とレナータ・テバルティ(1922~2004)のジョイント・コンサートが実現しました。それぞれアリアや歌曲を歌いましたが、圧巻は二重唱、コレリはオテロの全曲盤を残さなかった事であって貴重ですが、突き抜けるような輝かしい美声は、現代の歌手からは聴く事の出来ない魅力を持っています。テバルティの貫禄ある歌唱も見事です。ウィーン生まれの名指揮者エーリッヒ・ラインスドルフ(1912~1993)はアメリカに渡ってボストン交響楽団の常任指揮者をはじめアメリカ各地のオーケストラを指揮、1978年以降はヨーロッパに戻り各地の名門オーケストラを指揮して活躍しました。このベルリン・フィルとの「ラ・ヴァルス」はウィーン出身の指揮者ならではの絶妙なバトンテクニックで聴かせた名演。現代の巨匠リッカルド・ムーティ(1945~ )はシューマンの交響曲第4番を大変得意にしている、度々取り上げていますが、なかでもこの1993年の演奏は、この曲の幻想性よりもシンフォニック性を全面に押し出した完成度の高い名演です。(中川)

\*\*\*\*\*

### リヒャルト・シュトラウス(1864~1949):

#### 交響詩“死と変容” Op.24

カール・ベーム指揮

ドレスデン・シュターツカペレ(ドレスデン国立歌劇場管弦楽団)  
(1972.8.15 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

### ロベルト・シューマン(1810~1856):

#### チェロ協奏曲イ短調 Op.129

ジャクリーヌ・デュ・プレ(チェロ)

マルティン・トウルノフスキー指揮北ドイツ放送交響楽団  
(1969.1.24 北ドイツ放送局大ホールでのLive)

\*\*\* 休憩 \*\*\*

### ジュゼッペ・ヴェルディ(1813~1901):

#### 歌劇“オテロ” 第1幕～すでに夜は更けた

フランコ・コレリ(テノール)/レナータ・テバルティ(ソプラノ)

森 正指揮東京フィルハーモニー交響楽団  
(1973.11.21 NHKホールでのLive)

### モーリス・ラヴェル(1875~1937):

#### ラ・ヴァルス - 管弦楽のための舞踊詩 -

エーリッヒ・ラインスドルフ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団  
(1989.10.10 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

### ロベルト・シューマン(1810~1856):

#### 交響曲第4番ニ短調 Op.120

リッカルド・ムーティ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団  
(1993.5.24 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive)

★ホームページアドレス <http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/>

# 曲目解説

## リヒャルト・シュトラウス：交響詩「死と変容」作品24

リヒャルト・シュトラウスは7つの交響詩を作曲しましたが、そのすべてが1888年から1898年の間に集中していて、「死と変容」は第2作目に当たります。1890年6月アイゼナツハでシュトラウス自身の指揮で初演されました。人間の死と死後の浄化をテーマにしていますが、特定の文学作品等はなく、シュトラウスの自由な想像力によって物語は展開して行きます。「病室で寝ている病人は死を前におびえしみながら、過去の美しい人生を回想する。迫り来る死との戦い、わずかに残されたあの世の世界が急に開け、清らかな光明に手を伸ばしながら息を絶つ。死人の顔は気高い微笑に変わっていた…」という物語は、いくつもの動機が巧みな作曲技法によって、交響詩の創始者リストとは異なる独自の描写性を生み出しました。シュトラウスの全作品の中で最も心を動かされる傑作です。

## シューマン：チェロ協奏曲イ短調作品129

シューマン唯一のチェロ協奏曲は、1850年40歳の頃の作品と言われています。デュッセルドルフで作曲され、シューマンの死後1860年ライプツィヒ音楽院でルートヴィヒ・エーベルトの独奏で初演されました。この頃のシューマンは精神錯乱の病が進んでいましたが、このチェロ協奏曲は管弦楽が終始伴奏にまわり、独奏チェロを全面に押し出しながら、ロマンティックな詩情とチェロ特有のメロウな音色を奏でます。円熟した技法によって書かれたこの作品は、ドヴォルザークやエルガーと並んで、古今のチェロ協奏曲の傑作のひとつとして知られています。クララ・シューマンはこの作品を「ロマンティックな性質、飛翔感、新鮮さとユーモア」とほめ称えています。

第1楽章 速くなく 第2楽章 ゆるやかに 第3楽章 生き生きと

## ヴェルディ：歌劇「オテロ」

「オテロ」は、イギリスの文豪シェークスピアの戯曲をアリゴ・ボイトの翻案台本とし、ヴェルディがオペラ化したもので、1886年74歳の時に作曲、翌87年2月5日にミラノ・スカラ座で初演されました。物語は、15世紀のキプロス島が舞台で、「アフリカ、モール族の将軍オテロは、ヴェネチアの貴族の娘デスデモナと愛し合って結婚します。キプロス島にトルコ軍の艦隊が侵入すると、オテロは敵艦隊をしりぞけた功績で、キプロス島の総監に就任。しかし、部下イアーゴの悪巧みに乗って無実な最愛の妻を疑い、ついには絞殺してしまいます。やがてイアーゴの仕業だと分かったら、オテロは息絶えたデスデモナの前でおのれの罪を詫言、わが胸に剣を突き刺すと、彼女の唇に接吻して倒れるのでした。」「すでに夜は更けた」は第1幕で、トルコ軍を敗ったオテロの一行が港に凱旋。賑やかな祝宴が終った後、夜更けの海岸で、オテロとデスデモナが歌う美しい愛の二重唱です。劇と音楽の統一感、豊かな旋律にあふれたヴェルディ晩年の傑作です。

## ラヴェル：ラ・ヴァルス 一管弦楽のための舞踊詩一

ラヴェルは、ウィーンとワルツに何か惹かれるところがあったようで、1906年頃からオーケストラのためのワルツを書く構想を持っていました。1920年ロシアバレエ団のディアギレフからの委嘱を受けて、この構想を基に完成させたのが、フランス語でワルツの事を言う「ラ・ヴァルス」です。1920年12月12日にカミュ・シャヴィヤール指揮ラムレー管弦楽団によってオーケストラ初演されますが、ディアギレフは曲の素晴らしさは認めつつも、バレエには不向きとしてバレエ上演は拒否しました。結局、ボレロの委嘱者でバレリーナのイダ・ルビンシュテインのバレエ団が1928年11月20日（一説によると1929年5月23日）にパリのオペラ座で上演しました。曲は明確なワルツが全曲展開するわけではなく、ワルツの断片のようなものが、見え隠れしながら高揚して行き、目もくらむような終結へなだれ込んで行きます。ウイナ・ワルツへのオマージュ、あるいはパロディとも言えますが、卓越した管弦楽法によって、ラヴェルの代表的な名曲に数えられています。

## シューマン：交響曲第4番ニ調作品120

シューマンの残した4曲の交響曲のうち、第1番が1841年に作られ、その年の9月には2番目の交響曲が作曲されました。これが今日第4番と言われる交響曲です。第1番は好評をもって迎えられましたが、この作品はさほど評判にならなかったため、シューマンは出版を見合わせ、改訂を施し10年後の1851年に第4番として出版しました。1853年、デュッセルドルフでシューマン自身の指揮で再演されました。4つの楽章は切れ目なく演奏され、構成的にもそれぞれの楽章が密接な関連性を持っています。シューマン自身が「交響的幻想曲」と名付けていたように、全体は憂愁味と幻想的な雰囲気が漂い、ロマンの香りを全開します。シューマンの交響曲を代表する傑作です。

第1楽章 アンダンテアレグロ 第2楽章 ロマンツァ  
第3楽章 スケルツォ 第4楽章 アレグロプレスト